６．知って得するってどんなこと

防災には完全な対策はありませんが、減災するハード的あるいはソフト的方法はあります。ということは、様々な方法があって、その場或いは地域に合わせた方法があるということでもあります。

したがって、その方法を知るということは基本的には重要なことではありますが、知っているだけでは実践には役に立ちません。災害は、突然にどんなことが待っているのかわかりませんので、知識を使えるようにしなければなりません。

知るということでは、何を知るのかということが大事で、防災では失敗例を知ることが実践に使える兵法であるということができます。これまで多くの自然災害があり、それなりの犠牲を払って得た知識や工夫があります。しかし、災害は全く同じ条件で同じような被害が公式のようには発現することはなく、いわば盲点、弱点を突くかのように起きるものです。その時々で、災害は経験の修正や改善で対応してきたということができます。

知ることは次の段階で応用が期待できることや、関連する領域との隙間が埋まって、幅の広い知見を得る可能性が出てきて、新たな対応が展開できるというところがあります。

防災対策は、被害が及ばないようなところに移転したり、耐震化を完璧にし、護岸のスーパー化を図って、ダムの機能を向上させたりというような方法には物理的にも、経済的にも限界があります。そうなると、いかにコストをかけないで知恵や工夫で被害の最小化を図るかということになりますので、ここで基本となるのは、これまでの災害対応や失敗例は参考になります。これまでは、災害があると復旧や復興の一方向に向かって相当なエネルギーをかけてきました。しかし、のど元過ぎると、過去を思い出したくないということもありますが、冷静な分析や評価はせずにひたすら日常に戻ろうとします。同じようなことは起きないにしても、危機管理的な視点でも問題点の抽出という作業を実施して、課題解決を図っていくということがないと、災害への対応スタンスは一過性のものになって知の蓄積がなされないということになります。防災は、国土の利用の在り方、ハード対策の投資効果、少子高齢化、地方再生等と大いに関係することで、一元化した政策の立案をしていかないとその場限りのものになっていくと思われます。東日本大震災でも、復旧復興が進んでいる面は確かにありますが、失ったものも多くあります。実際に現評価と次世代における評価には多くの問題点はありますが、いまが良ければでは、先に大きなお返しが来ることもあると考えるのは決して杞憂ではないと思います。私たちの暮らしは、モノだけではありませんので、豊かで、安心して安定な生活ができるということは、自然との共生が前提です。可能な限り自然現象に負荷を与えるような行為は避けなければなりませんし、自然災害を受け入れられるような災害文化、災害風土も一考を要することです。自然は恵みであり災禍をもたらすという両面性があることは十分経験しているわけで、これらをどう生かしていくかは、まさに我々のこれまでの経験を活かすことにもつながるということだと思います。防災は関心を持ち続けることだといわれますが、そのベースには知るという行為があります。